

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2017

課題番号：24530863

研究課題名(和文) 非行からの離脱プロセスに関する研究 反応の柔軟性が抑うつに耐える力に及ぼす影響

研究課題名(英文) The recovery process from delinquency: the relevance between flexibility of reaction and the ability of not-be-affected by the depressive negative emotions.

研究代表者

河野 莊子 (KONO, Shoko)

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号：00313924

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：抑うつに耐える力を強化することは、非行からの離脱のために必要な要素の1つである。大学生は、困難に遭遇した時、その状況をうまく乗り切ることができると、自分に暗示をかけることで、不安に向き合う強さを得る。しかし、非行少年は、自分の感じている感情の処理に注意が向き、寂しくなったり不安になったりしないために自己暗示を用いる。非行をすること自体が、自らの孤独や不安とどう向き合うかということと密接に関係している可能性がある。

研究成果の概要(英文)： It is the essential with the recovery from delinquency to reinforce "the ability of not-affected the depressive negative emotions in one's mind". If they encountered to the difficult situations, the non-delinquency group took the power for confronting the anxiety by the self-suggestion "I could do it well". On the other hand, the delinquency group took the power for confronting the anxiety by the self-suggestion "I did not feel any loneliness and anxiety". Delinquents encouraged themselves by denying loneliness and anxiety. We discussed that the first step of the recovery from delinquency was to recognize loneliness and anxiety.

研究分野：臨床心理学

キーワード：非行からの立ち直り 抑うつに耐える力 反応の柔軟性 非行・犯罪者

1. 研究開始当初の背景

「人はいかにして非行や犯罪から離脱するのか」、これは、近年、特に海外で精力的に研究されるようになったテーマである。日本においては、これに類する研究はほとんどなされていない。研究代表者は、非行少年たちと個人心理面接を行い、自分にとって都合の悪い事柄が面接のテーマになると、検討しないですまそうとする姿を多く見てきた。そして、「抑うつに耐える力」を強化することが、離脱のために必要な要素の1つだと考えるようになった。

2. 研究の目的

(1) 研究1では、非行少年と大学生を対象に、抑うつに耐える力の強化因子として、「反応の柔軟性(ストレスに対する意識的対処と無意識的反応)」を取りあげ、問題行動との関連性を検討する。

(2) 非行からの離脱を行う上で重要となるものとして抑うつに耐える力があるが、それは何によって高まる(あるいは低くなる)のかということについては、まだ十分明らかにされていない。研究2では、成人犯罪者を対象に、抑うつに耐える力に影響する要因として、反応の柔軟性と共感性を想定する。

(3) しばしば、ストレスが犯罪の原因と言われるが、大きなストレスを受けても犯罪をしない者は多くいるし、ささいなストレスがきっかけで犯罪に向かう者もいる。むしろ、ストレスの大きさよりも、ストレスへの対処(コーピング)が適切にできないことが犯罪と関係しているのではないか。研究3では、犯罪者がストレスに対しどのような対処をしやすいのかを調査する。

(4) 研究4では、非行から立ち直った者にどの程度抑うつに耐える力があるのかを調査することで、非行からの立ち直りと抑うつに耐える力との関係を明らかにする。

(5) 一連の研究を通して、抑うつに耐える力尺度には、いくつかの修正が必要な点があることに、研究代表者らは気づいた。まずは、既存の尺度を検討し、問題となる点を明らかにしていくことが望まれる。研究5では、確認的因子分析を用い、モデルとして3つの下位尺度を置くことが適切かどうか検討する。

3. 研究の方法

(1) 以下の内容の質問紙を実施した。

抑うつに耐える力尺度

近藤ら(2008)が作成したものを用いた。全14項目で「不安に向き合う力」、「孤独に耐える力」、「強がらずに自己開示する態度」の3つの下位尺度からなる。5件法で回答してもらい、合計得点が高いほど抑うつに耐える力が高いとした。

反応の柔軟性を測る項目

Connor-Smithら(2000)が開発した尺度を、筆者らが邦訳して使用した。この尺度は、調査対象者に、実際に起こったストレス事象を想起してもらい、自分がどのような対処・反応をしたかを問うものである。5つの下位尺度からなり、内訳は、意識的対処として、問題解決型コーピング(「問題を解決しようとして状況を変えようとして行動したりした」など)、情動焦点型コーピング(「その状況から学べることやそこから得られる良いことについて考えた」など)、非関与コーピング(「これは現実ではないと自分に言い聞かせた」など)、無意識的反応として、無意識的な関与(「自分がしたことや言ったことについて考えずにはいらなかった」など)、無意識的な非関与(「心が空っぽになって何も考えられなくなった」など)である。全57項目で、4件法で回答してもらい、得点が高いほど、ストレス下である種の意識的対処や無意識的反応をしやすとした。

逸脱・迷惑行為測定尺度

吉田ら(1999)を参考に、著者らで質問項目を追加・修正し、逸脱・迷惑行為測定尺度を作成した。「他人の傘を勝手に使ったことがある」など全13項目で、5件法でたずねた。合計得点が高いほど、逸脱・迷惑行為を高頻度でおこなっているとした。

調査対象者は、少年鑑別所に入所中の男子85名(平均16.5歳, $SD=1.60$)、大学生91名(男子51名、女子40名、平均19.4歳, $SD=1.04$)である。

(2) 以下の内容の質問紙を実施した。

抑うつに耐える力尺度

反応の柔軟性を測る項目

共感性尺度

岡本・河野(2011)で使用した項目に基づき、認知領域と情動領域の2つからなる対象者別共感性尺度を作成した。共感を向ける対象者の設定を、「自分の事件の被害者」と「一番大切な人」としたため、「被害者への認知領域の共感」「被害者への情動領域の共感」「大切な人への認知領域の共感」「大切な人への情動領域の共感」の4つを測定している(全20項目)。

逸脱・迷惑行為測定尺度

日本語版社会的望ましさ尺度(北村・鈴木, 1986, 以下SDSとする)の短縮版(10項目)。

調査対象者は、刑事施設に入所中の男子受刑者328名。ただし、分析にあたっては、回答に欠損値のない者230名を用いた(平均44.7歳, $SD=11.2$)。調査対象者の主な犯罪種類により、財産犯、薬物犯、性犯、粗暴犯、交通犯、放火犯の6つに分類した。

(3) 以下の内容の質問紙を実施した。

ストレスへの対処に関する項目

調査対象者に、実際に経験したストレス場面を思い出してもらい、その内容を記載して

もらった。そして、そのストレス場面がどれくらいストレスであったかを評定してもらった。さらに、そのストレスに対しどのような対処をしたかを、反応の柔軟性を測る項目を用いて、回答してもらった。

対象者は、刑事施設に入所中の男子受刑者 845 名。ただし、今回の分析では、集計作業の終わった者のうち、回答に欠損値のない 351 名を用いている(平均 44.4 歳, $SD=10.9$)。調査対象者の主な犯罪種類により、財産犯、薬物犯、性犯、粗暴犯、交通犯、放火犯の 6 つに分類した。また、ストレス場面の回答について、誰に対してストレスを感じているかによって、「自分」「親・同胞」「妻・恋人・子」「友人・知人」「その他の者」「仕事・職場」に分類した

(4) 以下の内容の質問紙を実施した。

抑うつに耐える力尺度

逸脱行動の経験について訊ねる項目

高校 1 年生の時と現在における、逸脱行為の経験(家族以外の人のもち物を勝手に借りる・友人と暴力をとまなうけんかをする)について、それぞれ「まったくしない」「いちどだけした」「少しした」「ときどきした」「しょっちゅうした」のいずれかで回答を求めた。

調査対象者は、A 大学の男子学生 114 名(平均 19.32 歳, $SD=.96$)である。

(5) 研究 4 で用いた抑うつに耐える力尺度に関するデータを用いた。

4. 研究成果

(1) 迷惑行為を従属変数とし、抑うつに耐える力の 3 つの下位尺度を独立変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)と、同じく迷惑行為を従属変数とするが、反応の柔軟性の 5 つの下位尺度を独立変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)をおこなった。それらをもとに、パス解析をおこなった結果が、Fig.1 と Fig.2 である。それぞれの、モデル図と有意なパス係数を示す。Fig.1 は、 $R^2=13.138$, $df=16$, $p=.663$ で、 $RMR=1.164$, $GFI=.969$, $AGFI=.913$, $CFI=1.000$, $RMSEA=.000$ であり、Fig.2 は、 $R^2=11.460$, $df=12$, $p=.490$, $GFI=.964$, $AGFI=.916$,

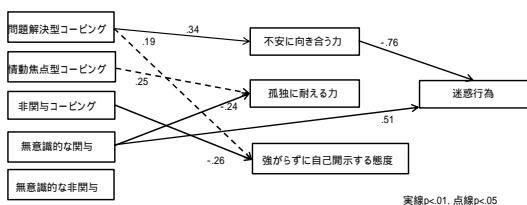


Fig.1 反応の柔軟性と抑うつに耐える力が迷惑行為の出現に及ぼす影響(非行群)

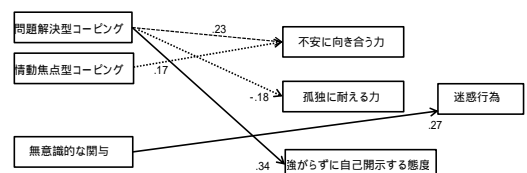


Fig.2 反応の柔軟性と抑うつに耐える力が迷惑行為の出現に及ぼす影響(大学生群)

$CFI=1.000$, $RMSEA=.000$ であったため、どちらも適合度は十分と判断した。

2 群間で、もっとも特徴的なのは、情動焦点型コーピングのあり方である。大学生は、不安に向き合う力に正の影響、非行少年は、孤独に耐える力に正の影響を及ぼしていた。自己暗示によって不安に向き合う強さを得る大学生に対して、非行少年は、寂しくなったり不安になつたりしないために自己暗示を用いる。一方、2 群の共通点は、無意識的な関与が迷惑行為の出現に直接的に影響を及ぼしていることである。大学生も非行少年も、ストレスを意識化して、どのような対処ができるかを考える力をもつことが必要である。本研究で、抑うつに耐える力と迷惑行為との間に有意なパスを引くことができなかった。これに関しては、今後の検討課題としたい。

(2) 抑うつに耐える力尺度の各下位尺度を従属変数とし、反応の柔軟性尺度と共感性尺度の各下位尺度、及び SDS と年齢を独立変数とする重回帰分析を実施した(ステップワイズ法)。結果を Table 1~3 に示す。

以上のことから、反応の柔軟性に関しては、意識的対処である「問題解決コーピング」や「情動焦点型コーピング」が高いほど抑うつに耐える力を高め、一部例外はあるが無意識的反応を低めることでおおむね抑うつに耐える力を高めることがうかがえた。また、大切な存在に対する共感性を高めることで抑うつに耐える力も高まることもうかがえた。

Table 1 「不安に向き合う力」を従属変数とする重回帰分析

独立変数	標準偏回帰係数	VIF
問題解決型コーピング	.196 **	1.653
無意識的な関与	.331 **	3.500
無意識的な非関与	-.444 **	2.690
大切な人への認知領域の共感	.342 **	1.162
SDS	-.156 **	1.090

$R^2=.421$, 自由度調整済 $R^2=.408$ * $p<.05$ ** $p<.01$
 $F(5,224)=32.555$ $p<.001$

Table 2 「孤独に耐える力」を従属変数とする重回帰分析

独立変数	標準偏回帰係数	VIF
情動焦点型コーピング	.257 **	1.392
無意識的な関与	-.200 *	2.592
無意識的な非関与	-.244 *	2.414
大切な人への情動領域の共感	-.207 **	1.109

$R^2=.155$, 自由度調整済 $R^2=.140$ * $p<.05$ ** $p<.01$
 $F(4,225)=10.291$ $p<.001$

Table 3 「強がらずに自己開示する態度」を従属変数とする重回帰分析

独立変数	標準偏回帰係数	VIF
問題解決型コーピング	.271 **	1.409
無意識的な関与	-.332 **	1.409

$R^2=.087$, 自由度調整済 $R^2=.079$ * $p<.05$ ** $p<.01$
 $F(2,227)=10.780$ $p<.001$

(3) 犯罪種類別でストレスの対象者別でのストレスへの対処がどのように異なるかを調べるため、反応の柔軟性尺度の各下位尺度の得点を従属変数とし、犯罪種類別(財産犯/薬物犯/粗暴犯の 3 水準)とストレスの対象者別(自分/親・同胞/妻・恋人・子/友人・知人/その他の者/仕事・職場の 6 水準)を独立変数とする 2 要因分散分析(いずれの独立変

数も被験者間要因)を実施した。

その結果、財産犯のストレスへの対処法が特異であることがうかがえた。特に、自分自身がストレスの原因になっている場合は、現実的な問題解決法をあまりとらない上に、問題から目をそらしたり、くよくよと考えたりするといったこともあまりしない。また、その他の者がストレスの原因になっている場合は、無意識的な対処の方法をとりがちであることが明らかとなった。

(4)「孤独に耐える力」「不安に向き合う力」「強がらずに自己開示する態度」のそれぞれについて、立ち直り群(4名)非行継続群(4名)非行なし群(74名)の3群での1要因の分散分析を行った。「孤独に耐える力」と「強がらずに自己開示する態度」をそれぞれ従属変数とする場合で主効果が有意となった($F(2,79)=3.43, p<.05, F(2,79)=4.51, p<.05$)。多重比較の結果、「孤独に耐える力」を従属変数とした場合では、立ち直り群>非行継続群($p<.05$)、非行なし群>非行継続群(有意傾向)となり、「強がらずに自己開示する態度」を従属変数とした場合では、非行なし群>立ち直り群($p<.05$)となった。

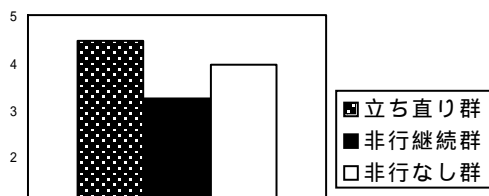


Fig.1 孤独に耐える力

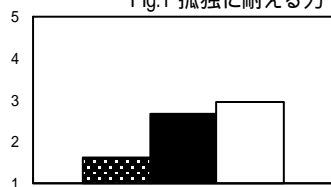


Fig.2 強がらずに自己開示する態度

孤独に耐える力得点は、立ち直り群が非行継続群よりも有意に高かった。「孤独に耐える力」とは、一人でいても落ち着かなくなることなく、その時間を楽しむことができるような力のことをさす。非行行動をやめるためには、孤独を感じても行動化することなく、心の中に保持し続けることができるような力が必要である。このことは、有意傾向ではあるものの、非行なし群のほうが、非行継続群よりも高い得点であったことから支持されよう。非行をすること自体が、自らの孤独とどう向き合うかということと密接に関係している可能性がある。

強がらず自己開示する態度得点は、非行なし群のほうが立ち直り群よりも有意に高かった。「強がらず自己開示する態度」とは、自分の弱さや本音を、素直に他者に開示できる態度のことをさす。自分の気持ちを他者に

開示することは、自らの気持ちの整理ができるだけではなく、他者からの良い援助を引き出す可能性をも生起させる。非行から立ち直るために重要な要素だと考えたが、自分の弱さを他者に見せないことが、立ち直るための重要な原動力となる可能性が示唆された。

(5)抑うつに耐える力尺度を確認的因子分析で検討したところ、3つの下位尺度すべてを用いたモデルでは適合度が十分なものとならなかった。「抑うつに耐える力」は、「孤独に耐える力」「不安に向き合う力」「強がらずに自己開示する態度」の3つの下位尺度からなるとするよりも、「孤独に耐える力」と「不安に向き合う力」、あるいは「不安に向き合う力」と「強がらずに自己開示する態度」の下位尺度の組み合わせからなるものと考えたほうがよさそうである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 6 件)

河野 莊子、岡本 英生、「抑うつに耐える力尺度」の再検討、犯罪心理学研究特別号第 55 巻、2017、pp.198-199

河野 莊子、岡本 英生、抑うつに耐える力は非行からの立ち直りとどのように関係するのか、犯罪心理学研究特別号第 54 巻、2016、pp.166-167

岡本 英生、河野 莊子、星あづさ、成人犯罪者にとってのストレス体験とその対処法、犯罪心理学研究特別号第 53 巻、2015、pp.134-135

岡本 英生、河野 莊子、星あづさ、反応の柔軟性が抑うつに耐える力に及ぼす影響 - 成人犯罪者データによる検討 -、犯罪心理学研究特別号第 52 巻、2014、pp.118-119

河野 莊子、岡本 英生、反応の柔軟性が抑うつに耐える力に及ぼす影響 大学生の自己申告による逸脱行動との関連性、犯罪心理学研究特別号第 51 巻、2013、pp.150-151

河野 莊子、岡本 英生、近藤 淳哉、栗本 真希、反応の柔軟性が抑うつに耐える力に及ぼす影響 非行からの離脱に必要なものとは、犯罪心理学研究特別号第 50 巻、2012、pp.98-99

6. 研究組織

(1)研究代表者

河野 莊子 (KONO, Shoko)

名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授

研究者番号：00313924

(2)研究分担者

岡本 英生 (OKAMOTO, Hideo)

奈良女子大学・生活環境科学系・教授

研究者番号：30508669